

考える葦にもなれない



広瀬 瑞記

妬みと羨みによる行動

「妬み」って怖いよー 特に女の「妬み」って怖いよ。

一理あるな、そう思った私も以前その女の「妬み」ってヤツの被害を受けたことがあるのだ。その相手を陥れようとか、そんな気持ちは1ナノミクロンもない。ただあるがままに居ただけなのに、「妬み」を買ったらしく、何だか大変な目にあっただ。

そんな彼女はリアルでお付き合いのある方々がいる中で「私は今でも連絡を取り合ってる友人たちがいるが、全て損得でしか判断してない」的なことを呟いていた。ふと思うのだが、彼女のこんな呟きを見たリアルな友人たちはどう思うのだろうか？

「えっ?! 私ってあなたのプラスになるから今も連絡してくれてるの? もしマイナスになったら、もう連絡してこないの?」

と思うのかな? それとも、

「あなたとの関係は私にとってもプラスだからマイナスになることはないよねー」

と思うのかな?

もし、後者なら何と言う楽観的な人なのだろう。

彼女を例に話すことは私の中にある薄っぺらい良心が痛むのだが、彼女は学生時代のクラスメートや部活の友達、塾等で知り合った友達の中から「自分が望む地位」を得る為に、相手を踏み台にしてステップアップしようとするような人なのである。こういう言い方をしてしまうと、彼女を批判しているようなので言い換えれば、「自分の欲に忠実に動く野心家で、野心の為に友情すら犠牲にする人」なのである。

ちょっとは良い印象を持って頂けるような言い方になりました?

彼女は自分が望む地位に既に人が居た場合、その相手の立場を羨み、そして妬み、相手を陥れることで自分の地位を確立させようとするのだ。

うん、納得。

別に今になって彼女に文句を言うつもりもない。ただ、踏み台にされた人の気持ちを少しは考えてみたら？という気になってしまう。

でも、それこそ「馬の耳になんとか」なんだろう。きっと理解出来ないだろうし、しようとするしないのだろう。

ただ、思うのはそういう人間関係、友人関係を築いていくことが楽しいのだろうか。

恐らく、彼女にとったら「楽しい」のだろう。

何と言う不毛な友人関係だね。それって。

ひとりになりたくないから、ひとりになる

「孤独」で人は死にますが、「孤立」では人は死にません。

友人にふと言われた一言だが、先日孤立死した方がいらっしゃるというニュースを見た。

おい、「孤立」でも人は死ぬんじゃない！人を殺めることができるのは「孤独」だけの権利ではないんじゃない。「孤立」も同じような権利を与えられてるのだ。だから、「孤立」と「孤独」はお互いの力を持って人を殺める…

なんて、ことはないのかな。

ところで、ふと疑問に思う。「孤独」と「孤立」って何が違うのだ？ということ。

こういう時は自分よりも賢く、ボキャブラリー豊富で老若男女から愛される存在である国語の辞書様に頼るのが一番。早速辞書でこれらの言葉の意味を見てみると、

孤立【名・自サ】

……(助けてくれる者や仲間がなく)ただ、ひとりであること。Ex.孤立無縁

孤独【名・形動ダ】

……仲間、味方がなくて、さびしそうな様子。ひとりぼっち。Ex.孤独死

※三省堂 国語辞典参照

「ひとりであること」と「ひとりぼっち」。両方とも「ひとり」であることは変わらないが、何故表現が違うのだろう。そもそも、「ひとり」と「ひとりぼっち」って一体何が違うのか？「ぼっち」がつくだけで、格上げになるの？というか、「ひとり」も「ぼっち」も結局誰も居ないんじゃない。

などなど、脳内で無限ループの様に考えていく。でも、何をどう考えたって辿り着くのは「どっちもひとりだから、同じなんじゃない？」ということ。

堂々巡りをするのも疲れてきたので、ちょっと違う方法で考えてみることにしてみよう。

「孤立」って単語はどういう時に使うんだろう。

● 近所に住む頑固なじいさんは、その性格故に「孤立」した

● クラスメイトに無視されて「孤立」した

頑固なじいさんの場合、「孤立」じゃなくて「孤独」が日本語の文として正しい気がする。

● 近所に住む頑固なじいさんは、その性格故に「孤独」になった。

ほら、「孤立」より「孤独」の方がぴったり。そして「ひとりぼっち」感が増して、「孤独死」フラグが立ったような気がする。うんうん。

それじゃ、二つ目の例文を見ると、これは「孤立」が合う文章のような気がする。

● クラスメイトに無視されて「孤独」になった。

ほら、「孤立」の方が「孤独」よりも悲壮感が増したような気がする。

ということは、この場合は「孤立」を使用する方が正しいのか。

で、この二つの例文から考えると「孤独」っていうものは主語となる人が自ら望んで、もしくは自らの行動から「ひとり」になった時に使用されることが正しいのかもしれない。

逆に「孤立」は、主語となる人の行動…というよりも、周囲の人にもたらされる「ひとり」という状況に使用されるのではないだろうか。

ん？ そうなると「孤独」は能動的で「孤立」は受動的、ということ？

ん？ 「孤独死」は能動的に「ひとり」で死んで、「孤立死」は受動的に死んだってこと？

そもそも、「死」を能動的とか受動的とか言っているの？ 能動的に死んだら自殺なんじゃないの？

結局、「死」を迎えるまでの間に「ひとり」か「ぼっち」かで「孤立死」と「孤独死」の使用用途が変わること？なんじゃい、そりゃ。そんなイレギュラーな処理など、わたしの脳内では出来ませんよ？

とか、考えてたら頭がオーバーヒートしてきた。答えのないものを考えることは楽しいが、もう限界。アイスでも飲んでクールダウン。

ついでに将来の夢が「孤独死」だとか「孤立死」だとか言ってる友人に「ひとり」とか「ひとりぼっち」ではないことを理解してもらおう為に連絡してみよう。

「女」を武器に出来ないオンナ

「会社に香水をつけてきて…女を武器にするなんて、どういう神経してるの？」

出た出た。伝家宝刀の更年期課長の同性いびり。今回いびられているのは、我が社の営業No.1とされる女性の先輩だ。上司として如何なものかと思ってしまうのは、この先輩を憧れている故なのだろうか。叱られている姿を後輩たちに見せつけようとするのは、明らかに彼女のプライドをズツタズタのケチョンケチョンにしようとしているからなのだろう。

まー更年期課長が姑息にもそんな事をしたって、彼女の人気落ちるなどということはないのだけど。

個人の意見として、香水を付けることが女性を武器にしているなんてことにはならないと思う。良い匂いがしたから「ん?! コイツ、オレを誘ってるな…グヒヒヒ」なんて思う男がいるとしたら、ぜひ見てみたい。というか、ヒマラヤに棲むイエティを見つけ出す以上に難しいことなのではないか。そうですね、藤岡弘。隊長？

そもそも、商談をしようと思った相手が腐ったタマネギのような薫りをプンプンさせていたら、密室と化した会議室は途端に毒ガスルームに早変わり。商談をしようと思った面々は次々と倒れ、仕舞にはその命を落とすかもしれない…

これは、言いすぎか。

でも、満員電車に乗った時とか、エレベーターの中で汗臭かったり、加齢臭が漂ったりしたら、やはりいい気持ちはしないだろう。もっと言えば、気分が悪くなり、嘔吐などを引き起こすかもしれない、それが朝に遭遇してしまったものなら、その日一日のテンションは低空飛行を続けることが確実である。

更年期課長から指摘をされて数日後、「女の武器」と称された先輩がある資料を課長に叩きつけているのを目撃した。

曰く、「自分が受け持つ顧客全員に香水の薫りが不快か否かのアンケートを作成し、全て集計した」との事だ。

先輩の顧客の多くは、香水が不快とも思わないし、それが「女性」を強調しているものだと考えていないと答えたそうだ。

結局、枯れて「オンナ」を武器に出来ない更年期で加齢臭の心配をした方が良い、下半身が以上に太くていつもスカートがパツツンパツツンな課長の僻みだったというだけな話。

憧れの先輩は、そのアンケートと共に辞表を提出していたと聞いたのはそれから1ヶ月後の話。

早く「人間」になりたいのは妖怪だけとは限らない

あー早く、人間やめてーなー

「大丈夫、先輩は既に人間ではないからそんな心配しなくていいっすよ。それより、火、貸してくれない？」

今日も暑い。毎日が暑い。就業時間中、ずっと室内にいる業務ではないため、暑さが身体に攻撃を仕掛けて来る。

だから人間を辞めたいんだ。

ふと気付くと、常に社内でPCの前に座っている後輩が立って、「ほら、早く火、よこせよ！」とばかりに睨んでいる。

別に無視をしたつもりはない。ただ、脳内トリップを決めて別次元に行っていただけの話だ。

「だから、先輩はもう人間じゃないから大丈夫だって言ってるじゃないっすか。先輩はこの会社の「妖怪」と言われてるんですから。ねっ！だから、早く…」

この後輩は…。一応、4年も先輩に向かってそういう口を叩くものだから、今度コイツの直属の上司に文句を言ってやろうと脳内メモリーに刻み付ける。

私たちの生活は多くのルールが存在している。社会にもルールがあるし、会社にもタウンページくらいの厚さの「社内規約」なんて誰も読んでいないだろうルールブックが存在している。

私たちは規制されたルールの中でほんのわずかの自由を求めて生活をしているだけに過ぎない。だから、本当の自由など存在していないのだと思ってる。

じゃーいつになったら私たちは「自由」になれるのだろうか。

社会のルールにも、会社のルールにも、人と関わって生きていく為の最低限のルールを無視して本当の「自由」を味わえるのは、それこそ「人間を辞めた時」なのだろう。

別に「死にたい」とは思ってない。今は今で楽しいし、自分から全てに終止符を打つような勇気など持ち合わせていない。ただ、「人間を辞めたら自由なのかなー」と思ってしまう時がある。

思ってしまいが、それを実践しようなどと思ってない。ただ、何となく叫びたくなるのだ。それこそ、「ジャンガリアンハムスター!!!」と叫びたくなる衝動と似ている。

「ジャンガリアンハムスター」って濁点ばかりで叫んだら楽しいよな、と個人的に思ってるワードでそれに理解を示してくれる友人がいないのもまた悲しいところなのだが。

ま一人間を辞めた所で、結局は今を生きていることに変わりはなく、属しても居ない社会のルールに乗っ取って生きていかなければ「社会不適合者」の捺印をされてしまうことであろう。

妖怪人間なんちゃらだって、決して本当の意味での「自由」ではなかったではないか。

社会から脱することで得られる「自由」を私たちは味わうことなく、この世から排除されてしまう。

だから、多くのルールの中に存在する抜け道から自分に合う「自由」を謳歌するしかないのだろう。

「先輩、もう1本、いきませんか？」

こうやって僕たちは給料泥棒と呼ばれながら、些細な自由な時間を謳歌しているのだ。可愛い後輩の頼みだ。クソが付くくらい暑いが付き合ってやるか…

不幸気質な女ともだち

特に予定はない。家の中が暑すぎるので外に出たが、早くも後悔している。なんだって、こんな人混みの中にいるのだから。クーラーにあたりに来たのに、結局はどこも節電、節電で暑いビル内。今の日本に涼しい場所なんて存在しているのか？と叫びたくなる始末。

あ一本当に暑い。

「いや一久し振りに都会に来たが、やはり人が多いね」

喧噪の中、はっきり声が聞こえたので前を見ると、男に腕を絡ませる女というカップル。もう絡ませるっていうレベルが人間業じゃないというか、もう蔦とか植物レベルの絡みつきっぷりに、異様なものを感じる。女の意地？そんなものが見て取れ視線を反らそうとした際、見えた男の左手の薬指には「The 結婚指輪」と言える代物が。一方女は、そういった類いの貴金属をしていない。これは、まさか…

不倫ですな。明らかに不倫ですよ、奥さん。

女は20代後半くらいなのに対し、男は明らかに40代半ば。これは紛う事なき不倫ですよ。

そういえば、去年久し振りに大学のサークル仲間に出会ったとき、学生の頃よく一緒に飲んだ女友達が自分の直属の上司と不倫をしている話をしていました。

彼女は前々からそういうところがあり、学生時代も「恋愛したい。彼氏が欲しい」と言いながら、セフレ止まりの関係を続けていた。それが、今や「セフレ」から「不倫」に昇格したらしい。

同年代の男と比べて、スマートで良いお店をたくさん知っていて、エスコートもちゃんとしてくれると自慢していたが、「不倫」は「不倫」だろと言いたくなかった。

というよりも、女の扱いが上手いっていう時点でそういうのに慣れてるってことに気が付かないのか？この女は。とサークル仲間から見られていたが、彼女はその視線に気付く事など全くなかった。

ふと思うんだけど、不倫やセフレを一度経験したことがある人って、別れても別の人とそういう関係を結ぶことが多いような気がする。

これってなんでだろう。

不幸を呼びやすい気質？

それとも、「遊びで良いや」って思われ上手？

いやいやいや、そんな「思われ上手」、嬉しくもないだろ。

でも、彼女が「我慢する自分って何て健気で可哀想なの…」という自己陶醉型の残念な子だったら、あながち「思われ上手」なのかもしれない。

そして、男はそういう女を巧みに嗅ぎ分け、「淋しそうだね。僕がその淋しさを癒してあげるよ」なんて近寄ってそういう関係を迫るのだろう。

これって男だけの問題なのか？

そういう「思われ上手」な女にも原因があるんじゃないのか？

現に彼女も職場では毎日会えるけど、連絡は頻繁には来ないし、上司が家にいる時間帯を避けて連絡をしていて、関係性を気付かれずに保つことが難しいのだと自慢気に話していたが、その「制限された恋愛」が本当の意味での「恋愛」なのかとってしまう。

「恋愛」なんて考え出すとめんどくさいから、この際放置するけど、女友達の「自己陶醉型の自分、可哀想な子」という子は、男の欲望の解消先になり、果てに「不倫」を繰り返し、自分を「悲劇のヒロイン」だと勘違いして周囲にそれを自慢するようになるのかもしれない。

幸せになれねーよなー

そんな人生って。

ところで、幸せってなんだよ。

焦るのは女だけとは限らない

最近、やたらと出費が激しいな。

飲み会がそんなにあったわけでもないし、まして合コンなどのお誘いなど皆無といって等しいだろう。

だが、財布が夏バテダイエットをしたかのように軽いのだ。細いのだ。

ふと部屋の中を見回すとやたらこ綺麗な厚紙と封筒。そして、タウンページくらいに分厚いカタログがあちらこちらに転がっている。

そこでふと思い出す。

ジューンブライドをキメようとしたヤツらの結婚式及び披露宴ラッシュが続いていたのだった。

結婚をした友人曰く、「女は30前に結婚したがる。だから、合コンに行った際は28くらいの女には気をつけろ。ヤツらは“恋人”ではなく“新郎”を探しているのだ」と。

そんな名言をドヤ顔で言ってたヤツも、合コンで知り合った28の女にそのまま結婚へと追い込まれ、最初は文句を言っていたが、今では良い関係を気付いていると聞いた。

最近、巷では「婚活」やら「街コン」なるものが人気らしい。

そう「人気らしい」と言いきってしまうくらいに全く興味は無い。

興味はないが、どんなものか実態は見てみたいというのが好奇心旺盛の自分の性か。

ということで、「婚活」サイトを覗いてみるとびっくりした。

本当にびっくりした。

なんだ?! オタク向けお見合いパーティーって?

なんだ?! BL好きお見合いパーティーって?

なんだ?! ゲーム限定お見合いパーティーって?

何だってアリなんだな。結婚したけりゃ。

そうやって冷めた目で見ってしまう自分が怖かったが、こればかりはしょうがない。そして、こういうパーティーが全国各地で開かれるということは、それだけの需要があるということであって…

大きな自然災害が続いて今まで一人で生きていこうと固く誓っていた人たちが、一人での生活に不安を感じ、耐えきれなくなり一生の伴侶を求めるようになったとある雑誌で見っていたが、まさかオタクと呼ばれる人たちの中でも同じようなことが発生し、ついにはオタク限定と銘打ったお見合いパーティーがここまで盛んになっていたとは考えていなかった。

「結婚」という契約に必死になっているのは、30代突入間際の女だけではないのだ。

結局、人は一人で生きるのには限界があって「淋しさ」に負けて同じような趣味を持つ人を求めているのだ。

自分の一生の伴侶として。

さて、ご祝儀貧乏となった事だし、「給料日まで如何に生き残るか？」が死活問題となった今、優しい先輩に泣きついてお昼を奢ってもらうにはどうするか？を考えることにしよう。

多少の残業は厭いません。

誰か奢って下さい。

冷やしポッキーを人は何故頼むのか？

執着心って怖いなと最近よく思う。

見栄って怖いなと最近よく思う。

どっちも簡単に自分を滅ぼす事も出来るし、他人を殺すことも出来る魔法の感情。

「持つな！」と言われて手放せるものでもないし、逆に「持て！」とも言い難い。ぶっちゃけ言ってしまうえば、そんなもの持つ必要もないし、それを大っぴらに表現する必要もないのだが、見栄とか執着心だけを支えに生きている人もいるわけで…

全くもって面倒くさい感情であることは確かだ。

執着心故に自分の親しい人を滅したとしても、本人は自分に原因があったということに気付かずに生きている。そして、「何故こうしてあげられなかったのか？」と声高らかに語っている姿を見ると、「結局己の保身のためだろ？人を滅したことへの後悔すら感じてないのだろ？」と言いたくなるが、オトナだからそんなこと言わない。言いたいけど言わない。これって案外重要なこと。

見栄だって同じ事だ。他人の目が気になり、結局己を良く見せたいという想いから己の力量以上のことをやろうとし、周囲に迷惑をかけたりするのだから、はた迷惑な感情だ。

それを己自身に科すのであれば別に文句も言わない。

ただ、外面が良い、見栄っ張りなんだな一くらいのことしか思わない。

しかし、己の体面を保つ、もしくはより良くする為に、他人にその罪を化す事は如何なものかと思う。

本人が望まずにその罪を着せている訳だから、これは冤罪と同等のことですよ。

そんなことを考えながらゴロゴロしてたら、だんだん感情なんていらぬものなんじゃないか？と思ってしまう。

しかし、感情がなければ文学も芸術も音楽も衰退してしまう。

だが、執着心などの感情がなくなれば本当の意味で「世界平和」という偽善者が好き好んでよく使う理想が見えて来るような気がするのだから、やっぱいらないんだよ、人間の感情ってさ。

そういえば、先日部署内で納涼会を開いた際、何故か二次会と称し苦手なカラオケに連行された時のこと、40代半ばのバリバリやり手の課長が何ら躊躇することなく冷やしポッキーなるものをオーダーした。

はっきり言ってカラオケにポッキーって必要か？歌ってる最中に食ったら喉に刺さるんじゃないか？それに、石原裕次郎が持っていたようなグラスの約1.5倍くらいの大きさのブランデーグラスにこれでもか！と氷が入っていて、これまた明らかに厨房のストレス発散になったようにポッキーがこれでもか！と突き刺された状態でやってきた。

自分の解釈で偏見かもしれないが、「カラオケで冷やしポッキーを頼んだ人はバブル世代」という格言を持っている。

年齢から言えば、かの課長も恐らくバブル期の甘い汁を味わっていた学生時代を謳歌したであろうことが想像つくが、まさかカラオケでポッキーとは。

やっぱりない。

後輩を含め、物心ついた時から不況を味わって来た人たちが多いこの部署でそのポッキーに手を付ける輩は存在せずに、氷だけがどんどん溶けていく。

何故、バブル世代が頼むポッキーを不況世代は頼まないのか？

たぶん、ポッキーを食べても腹はふくれぬし、歌うのに邪魔だ！という判断を不況世代はするのではないか？

正直、あれは見た目のインパクトだけでポッキーをもぐもぐしながら歌うことなんて無理だろう。

では、何故バブル世代は頼むのか？

たぶん容器然り、突き刺さった状態然り、インパクトがあるのと見た目が良いからという理由で頼むのではないだろうか。

その証拠に頼んだ張本人は全く手を付ける気配もないまま、課長へ気を使った女の子たちが食べていたことからして、体裁を良く見せるための行動なのだろう。

それこそ、見栄ではないか。

自分を良く見せたいという「見栄」から、昔まかり通っていたことをやろうとする「執着心」なのだろう。

彼の行動から言えることは人は「見栄」を意地する為に「執着」しているのだろう。

自分を美しく見せるために整形を繰り返す人と同じ行動なのだ。

そんなことを考えていたら余計ポッキーから手が遠ざかってしまったなんて上司に報告出来ない
ので、ここはおとなしくポッキーを頂く事にする。

ポッキーには罪などないのだから。

知識の海に溺れる人に縋る藁は存在するのか？

知識を得る事で失うものは数知れない。

知識を得る為に要する時間もそうだし、勉強しようとする労力もそれに当てはまるのだろう。

しかし、失うものは本当にそれだけなのだろうか。

昔、ある問題について調べたことがあった。特に何を意識した訳ではなく、テレビで特集されたその問題を全く知らなかったという自分に驚き、何故にそうなったのか？というただ純粋な知識欲を満たすためだけに調べ始めた。

そして、その問題を知るにつれ、その問題の重要性に気が付いた。

自身の知識にしたところで気が付いた。

失うものは時間や労力だけではない、ということ。

知識は血となり、骨となり、私たちが武装する鎧ともなるが、同時に私たちがあつたものを失う。

時間でも労力でもない。

自由だ。

私たちは知識を得る為に「自由」というものを失っていつてるのだ。

問題の重要性に気が付いた時には既に遅かった。

その問題の原因を知ったからこそ、その知識相応の対応をとらなければならないということに初めて気が付いたのだ。

「知る」前になど戻る事は出来ない。

何故なら骨となり、血となり身体に埋め込まれ、知識として私たちの身につけてしまったのだから。それこそ、食べ過ぎて付いた贅肉の様に、どんなに運動しても落とすことが難しいのと同じこと。

「知らないふり」も出来ない。だって、「知って」しまったのだから、「知らないふり」をすることは、知識を得た自分を否定することになってしまう。だから、「知る」前に戻ることは

など出来ないのだ。

知識を得れば、その知識に相応の行為を「社会」という世界が求めてくる。それが「知識を得る」という行為の本当の意味での対価なのだろう。そして、「社会」が求める行動を取るということは、「知らなかった」時なら許された行為が許されなくなるということなのかもしれない。

だから、自由が奪われるのだ。

しかし、自由は制限されるが、その知識を得る前まで見えなかった景色が見えるのだと思う。それは、まだ誰も到達したことのないものかもしれないし、多くの人がまだ見ていない、自分には見えない景色かもしれない。

そう考えられるようになれば、自由を奪われる恐怖は軽減されるのではないか。

軽減されても「視野が広がる」なんて甘美な言い訳のようにしか思えないのだが。

コーヒータイムの至福と引き換えに与えられた苦悩

「ユダヤ人だったんだって！！！」

店内に響き渡る声。そして、その発言に店内に居た誰もが不可思議な発言をした3人組に目がいった。

あまりの暑さに涼を求めて入ったのは某アメリカの某コーヒーチェーン店、スターなんちゃら。

店内はあまり広くなく、落ち着いた空間の中で現実逃避がしたいものの、これから行なうプレゼンの資料を見なくてはならないのは働く者としての悲しい性か。

冷たいアイスコーヒーを飲みながら、ゆっくりとプレゼンのイメージトレーニングをしていたら、店内のざわめきを縫うかのように聞こえた声。

「ユダヤ人」のイメージといったらやはり「イスラエル」とか「ユダヤ教」という言葉だろうか。あとは、ユダヤ人は金持ちだからアメリカの大統領選挙の時に味方につけておいた方がいい、とにかくイスラエルという国を持ち上げとけ！媚び売つといたもん勝ちなんだから！と言った大学の教授の発言くらいか。

そういえば、ユダヤ人の特徴として鼻が鷲鼻だ、ということを知ったことがある。それ故なのか、アングロサクソン系の人たちは「鷲鼻を持つ人は強い、怖い」というイメージを持っているらしい。

そんな鷲鼻を持って産まれてしまったアングロサクソン系の人々は自分の鼻を嫌い、整形する人が多いなんてことも聞いたことがある。

「鷲鼻」。名前からして、カッコいいではないか。

「鷲鼻」。英語で言ったら「イーグルノーズ」とかなのか？

日本人の「しょうゆ顔」なんて言われる人たちの鼻なんて「団子」なんだぞ。団子に比べたら驚の方が良いだろう。

食べ物かもしれないが主食にもならないし、逆に食べ過ぎたら胸焼けを起こす可能性の高い、味噌やしょうゆ、あんこに頼らなければ味気ない団子に比べたら数百倍、いや数千倍驚の方が良いのではないかと、思ってしまうのは、アングロサクソン系の人よりも鼻が低い日本人故の憧れなのだろうか。

まーそんな日本人も「脱団子鼻」を目指し、整形する人が多いのだからコンプレックスという点において「驚」だろうが「団子」だろうが、関係ないのかもしれない。

ただ、驚だって団子食うだろ？

やっぱ驚の方が強いじゃん！ 団子よりマシじゃん！！

と思ってしまうのは、権力主義、実力主義的な社会に溶け込み過ぎた故の思考なのだろうか。

そんな取留めのないことを考えていたら例の3人組が座る席から「エリザベート」という単語が聞こえた。

ハプスブルグ家について熱く語っている風でもないのに、恐らく歌劇としての「エリザベート」の話をしているのであろう。

という結論を出したところで、時間だからと次の営業先に向かう準備をする。結局、プレゼンのイメトレなど出来ず、見ていたようで見ていなかった資料を鞆に詰めた所で手が止まった。

おい！ユダヤ人の弾圧云々っていう描写があっても、エリザベートにユダヤ人は出てこないはずだぞ！

じゃー何なんだよ！ あの「ユダヤ人」発言は！！！！

夏が来れば思い出すのは尾瀬だけではない

「お盆くらい帰ってきたらどうなの？」

久し振りに連絡があったかと思ったら、そんなお小言か。

お盆。夏休み。帰省ラッシュ。大渋滞。甲子園にビールと枝豆。

休めるものなら休みたいのだが、この業界に身を置いてから「夏休み」というヤツや、「ゴールデンウィーク」というヤツも遠い存在となってしまったのだ。

この業界、多くの社員が休暇を取るこれらの休みが一番忙しく、「休み？何ソレ？美味しいの？」という錯乱状態まで達するような時期なのだ。

母よ、学生の頃のような自由な時間などを持つ資格など既に持ち合わせていないのだよ。

そして、ふと思い出す。

小学生の頃、毎年八月になると祖父母が住む田舎に帰省していたことを。

普段、都会と呼ばれる関東の一画に住む者にとって田舎での生活はとても刺激的で、毎年夏になると田舎に帰れることを喜んでいた。

それこそ、素直に、純粹に、ただ自然の中で遊べるのが楽しかったのだ。

ある年のこと、早めに目が覚めた父と二人で散歩をしていた際、祖父母が大切に育てている畑までやってきた。

目の前には朝日を受けキラキラとまばゆい光を放つ野菜の数々。

視線を泳がせれば自分の目の前に青々として、不思議の国のアリスのように「Eat me」と書いてる札をぶら下げてるのではないかとしか思えないキュウリが。父をそっと見やると、頷いている。

「馬のキュウリ！誰が取ったの??」

馬はキュウリは食べません。

と祖母に即答をしたら、啞然とされた。

実は、祖母がお盆の馬用に育てていたキュウリを父と私が味噌をつけて食べていたからだ。

何でも、お盆の時に使うからといくつかのキュウリと茄子をそのままにし、使う直前に収穫をして、お迎え用の馬と牛にしようとしていたらしいのだ。

そんな計画を知る由もない父と私は「これ、幸い！」と大きく育てて美味しそうなキュウリをモロキュウにして食ってしまったのだから、祖母も何も言えない。

手頃なサイズのキュウリが見つからない祖母は、ヌカ床から今朝漬けたばかりのキュウリに足となる割り箸を刺していた。

その年に先祖へお向かいにあがった馬のキュウリ氏はどこか水分が抜け、塩分を若干含んだしんなりした馬であったのは良い思い出だ。

そして、その次の年の盆、昨年同様父と畑を散歩していた私たちの目に信じられない光景が目に入った。

それは、祖父と祖母の畑に「馬用！」とマジックで書かれたキュウリが他の作物と一緒に何気ない風を装って収穫される時期を待っていたのだから。

祖母も昨年のようなことがないように、色々と考えたらしいのだがここまでやられたらそのキュウリを取って喰おうなどという気は起きませんよ。

オトナとコドモの違い

「帰って良いって言われたから、帰ろうとしたら上司に怒られたんすよ。これ、理不尽じゃないっすか？ 帰れって自分から言ったくせに…」

後輩に呼び出されて、残業もそこそこに居酒屋へやって来た。明日は今日の残りの業務の為に朝早く出勤しなければならないのか、と表情には出さず黙々とビールを飲もうとした瞬間に言われた。

「定時も過ぎたんだし、帰ったって別に問題はないはずじゃないっすか。自分から帰れって言ったくせに、本当は帰ってほしくないのならそう言えばいいじゃないっすか。もう意味わかんないっすよ。そんな茶番に付き合わされるこっちの身にもなってほしいっす。」

今日の暑さを忘れる為に、キンキンに冷えたビールを一気に飲み干す。まだ肴が来てないのでメニューを確認。暑さで胃がやられてるから、唐揚げは止めてキュウリの一本漬けくらいに留めておくか。

「何かにつけてゆとり世代は！とか言うのもはっきり言って嫌なんすよ。別に俺らが望んでゆとり世代って言われてる訳でもないのに、平気でそういうことを言っちゃうんだから、信じられないっす。」

帰れと上司に言われて、ホイホイと帰ってしまう人がいるということにまず驚いた。その言葉に込められた本当の意味が理解出来ずに、表面上の意味しか捉えることが出来ないヤツらが増えているのかと思うと、今後の新人研修で何らかの対策を練らないといけないだろう。

後輩よ、こんなくだらないことで、上司から呼び出される先輩の身にもなってみろ。

この上司の「帰れ」という言葉には、「年上に少しは気遣ってみせろよ」というお子様には理解出来ないけれど、オトナになったら理解しなくてはならない隠された意味が存在している。

たぶん、模範解答を述べるとすれば上司に「帰れ」と言われたら「何かお手伝いすることはありますか？」であろう。

もし、何かあれば上司はそのタイミングで仕事を振るかもしれないが「明日でもいい」などと言ってくれるであろう。特に何もなければ、「何もないから帰っても良い」ということを言われるはずだ。

そして、このタイミングで「では、お先に失礼します」と述べれば波風も起きぬまま、自分の評価も下げることなく一日の業務を終えることが出来るのだと思っている。

後輩はオトナになったら理解しなくてはならない単語の中に隠された意味が全く理解出来てない、このことが一番の問題なのだ。恐らくこの「帰れ」事件の後も同じようなことを繰り返していくのだと思うと、上司からも、後輩からも愚痴られるだけの存在なのがかかなり辛いところだ。

何故、単語の隠された意味というものが存在しているのか。

その意味が判らないと社会では生きていけないのか。

そもそも、その意味とは一体どこからやってきたのか。

そんなもん、判らない。

何処から来たのかなんて判らないし、社会で生き残る術かなど興味すらない。

ただ、見えない意味を汲み取って返答をするということは相手への気遣いであり、謙譲を意味しているのだと思っている。

日本語の会話には単語の意味以外にも汲み取らなくてはならない意味が含まれていることが多いように思う。結局、そういう隠された意味に気付くことが出来ずに、会話をしようとするが失敗し、嫌われるなんていうことが以前よりも多く目にするようになった。

よく言えば、英語的でストレートな感情表現が出来る人が増えている証拠なのかもしれない。だが、隠された単語の意味を汲み取りつつ、探りをいれて会話するのが日本語の醍醐味だと考えているからこそ、後輩みたいな反応しか出来ない人が増えていることに些かの不安感を持ってしまう。

ないものねだり

「普通じゃないことしてみたい。普通になりたくない。」

そんなこと言われたって「こうしたら普通じゃなくなる」なんて言えない。
それに好き好んで、普通じゃないことをしているわけではない。

個性を潰そうと躍起になっている猛者がいる中で、そんな生き方、好き好んでするわけないだろう？そんなことしていたら、いつか猛者たちに簀巻きにされて海に投げ込まれてしまう。

幼い頃から他人に言われ続けた「変だね」「変わっているね」の言葉。
別に自分が「そうになりたい」から選んだ道でもないのに、自分では周囲に合わせて「普通」であるように生きていたのに、言われ続けた言葉。

「多様性」を求める社会であれば良いのだろうが、社会や学校という場では「単一性」が求められる。

お山の大将の言うことに従い、考えることなど許されず、全ての人が同じであるということが求められる「単一性」な世の中。

はっきり言って生き難い。

自分で考え、納得し、そして行動したい人間にとって本当に生き難い世界が社会なのだ。
故に「社会不適合者」という素敵なレッテルを周囲から貼られ、自分の生きていく場所が見つけられず、フラフラする毎日。

そんな不安定な毎日であっても、他人と同じことが求められる「単一性」の中で生きることを考えれば、それで良いかと思ってしまう。

個性がない人ほど個性を求め、個性が強い人ほど普通に胸焦がれる。

結局、人なんてないもの強請りしかしない生き物なんだ。
隣りの庭の芝は自分の庭のそれよりも緑に見えるのが、世の常なんだ。

だから、今日も「単一性」であろうとする社会の中で「没個性」で生きていく。

鍵のかからない密室の中で

エレベーターが嫌いだ。

人間、得手不得手はあるのは当たり前だ。

「神」とは違い、全能な人間など存在しな。

だから、エレベーターが嫌いだ。

エレベーターに乗るくらいなら階段で行く。階段で辛い階数であっても、エレベーターに乗るくらいなら階段で行く。

デパートに行ったら絶対エスカレーターを選ぶ。

エレベーター。

別に落ちそうだし、ドアに挟まれそうだから嫌いという訳ではない。

そんなことを理由にしてたら、エスカレーターに挟まれそうだから嫌いだと主張するくらい滑稽だろう。

何が嫌いってまず名前だ。

エスカレーターだが、エレベーターだが名前が似過ぎていて、たまにどっちがどっちなのか判らなくなる。

名前以上に嫌いなのは、あの密室空間に見ず知らずの人間が乗っているということだ。

一般生活ではない、見知らぬ人同士が密室空間に入るという状況は、演劇的には面白いのかもしれないがあの箱に入った後、何をしたら良いのか判らなくなるし、視線を何処にやればいいのか判らなくなる。

多くの人も視線のやり場に困りはて、結果昇り続ける階数を見つめることくらいしかしない。

その状況が嫌いなのだ。

何階に降りますか？

すみません、五階で降ります。

自分の降りたい階を宣告しなくてはならないことが嫌なのだ。
五階で降りなくてはいけないのだけど、ちょっと六階に降りたくなるかもしれないじゃないか。
なのに、自分の降りたい階を宣告したが為に五階で降りなくてはならないという束縛が嫌なのだ。
。

だから、エレベーターが嫌いだ。

しかし、エレベーターガールが好きなのだから、どうしたら良いのだろうか？

過剰な自信の行く末は

またコイツか。

としか言えない。

呆れて何も言いたくないというのが正直なところだが、はっきり文句を言ってやりたい気持ちになってくる。これで何度目だ？お前の我が儘に付き合わされるのは。

周囲の輪を乱すヤツが居る。

既に決まったことなのに、後から「嫌だ」と平気な顔をして言ってくるヤツが居る。

全て丸く収まったのにも関わらず、自分の意向通りにならないと直ぐに文句を言い、他の女を丸め込め自分の勢力とさせて、多数決で自分の有利になる方に進めようとする。

ヤツが登場し、自分の意見を押し通してそれを強行させるのであれば、ヤツに全てを被せて状況を見ることに徹する。

ヤツは自分から進んで行動が取れるような人間じゃないことなんてとっくの昔に判りきっている。自分の力量を理解出来ず、出来ると思い込んで、恥をかくがいい。

右頬を叩かれて左頬を差し出すような「できた人間」じゃないんだよ、自分は。

ヤツが恥をかくのを、周囲から「できない人間」だと思われるその瞬間を見守ってやるよ。

そんなヤツが結婚をするらしい。

こんな紛いモノの「女王様」を娶ろうとするなんて、余程出来た人間か、逆に全く目の見えない人のどちらかだろう。

それとも、ヤツが結婚詐欺紛いのことでもしたのか？

伴侶となったヤツの顔を拝むという興味だけで、二次会へ参加を決意する。

下僕と社畜に違いはあるのか

汝、従順なる下部となれ。思慮は全て捨てられ。そして、我の思うように動けよ。それが絶対なのだから。

以前勤めていた会社でよく飲み連れて行ってやった後輩から、真夜中に電話があった。半年前にあった電話では年度途中で社長が急に変わり、親会社から新しい社長が来たと話していたが、毎月一度全社集会が開かれるらしく、その度にソイツが語る主義主張が全く理解出来ないと嘆いていた。また、ご大層なまでに声高らかに言い連ねるご高説が毎度毎度変わるらしく、何が何やら上層部すら手を焼いているが、手を焼きつつも、ゴマを擦りまくっていると話していた。

自分自身、直接ソイツの主義主張を聞いたわけではないので、何とも判断出来ないが、全社員を前に「考えるな！」と言えよことの出来る人なのだから、大した器の持ち主なのかもしれない。

大した器であって、大きいわけではない。

それこそネコの水飲みよりも小さい器なんだろうということが予測されるが、そんなこと後輩には言えない。

これから成長をしていかなくてはいけない会社で、その成長を進めていく社員に対し「考えるな」とはよく言えたものだと言放しで褒めてやりたい。

「考える」ことなく人の前進などない。「考える」ことを拒否するということは、現状維持をし、最後には維持すら出来ず衰退していくだけではないか。

新しい社長とか言う人は、自分の思うように動ける「ロボット」が欲しいだけなのだろう。だから、自分で思考し、行動の取れる「人間」は必要としてないのだ。

ここ最近の社会情勢ではないが、以前勤めていた会社が社長のワンマン経営へと傾きつつあることを、喜んで居ないにしろ、興味深いと思ってしまう。

しかし、会社がこのような動きを見せた今、この誇大妄想者の独裁者よりも恐ろしい存在がある。

それが、ヤツの独裁者発言に「素晴らしい人が社長になった」や「社長の発言に感動しちゃった」などと言って社長にすりすりゴマを擦っている大勢の社員の存在だ。

何故気付かない？

そんなヤツと仕事をして、君たちは幸福になれるのか？

知らぬが仏。

何も知らなければ、彼の発言が誇大妄想だなんて考えられないだろうし、右とか左とかも考えなくてすむのか。

それならば、「考えることを辞めよ。さすれば幸せとならん」ということか。

シロとクロ

スマ婚やらジミ婚やら何だか色々な「婚」が溢れている世の中だ。

ジミ婚は文字の通りの意味を持っているのだろうが、スマ婚って一体何なんだ？

スマートフォンな婚？

スマート婚って言われても何を持ってして「スマート」なのか全く理解出来ない。

色々と妄想、想像を膨らませた所で自分とは無縁の存在であることは絶対なので、特に考えないことにする。

そういえば、週末に人で賑わう都内某所を歩いていた時のことだ。

やたらと着飾った人々が某ロイヤルなんちゃらを占拠しているという状況に出くわした。

大通りに面した窓から見た店内は、ファミリーレストラン的な雰囲気似つかわしくない人々がわらわらいるのだから「異様」としか言えない。

二次会で男との出逢いを求める女が原型を全く留めていない、「それ、舞台で見た方が見栄えが良いじゃないか？」と思える顔をしていたり、そんな周囲の女どもを見ることなく、男たちだけで固まる白いネクタイの集団が、店内に立て籠っているのだから「異様」としか言えないだろう。

その異様さに驚きながら視線を上げると、チャペルの先端みたいなものが目に入った。

そして思い至る。

このファミレスの上に最近人気があると言われている結婚式場なるものがあるということ。

ということは、この某なんちゃらホストで二次会をしているのか？

なるほど、二次会も飲み放題だから参加者は皆、ソフトドリンクのドリンクバーに列を成しているのか。

新しいファミレスのサービスとして「二次会会場」という選択を選んだのか。

「そんなわけないだろ？ どうせ、二次会まで時間があるからこのファミレスにいてだけで、こんなところで二次会を開こうとする人間がいるか？」

友人の鋭いツッコミが横から入った。

しかし、披露宴から二次会に出席する人々がファミレスを占拠しているその様は「ここが二次会会場です」的な状態なのだから、自分のように考えたって何ら問題はないであろう。

問題があるとすれば、店内に入りたいのに入れず、彼らが店を出るまで待ち続けようとする一般の客がいるということだ。

一般客を受け入れるより、パーティー会場として貸し出した方が店側としては売上面から見ても、良いのかもしれない。

だったら、もうこのロイヤルホストで二次会をやる！ ということにして、さっさと新郎新婦を登場させろよ。待っている客が可哀想だろ？

などと思いつつも、これが喪服を着ている客が店を占拠している訳ではないのだから、良かったのかもしれないと、一人納得をした。

クロとシロ

ファミレス、二次会騒動の次はこれか？！

冠婚葬祭すぎないか、自分！

ご祝儀とかご仏前とか何なんだよ、おい！

客先でプレゼンをする前に精神統一をするため、駅近くの喫茶店に入った時のことだ。

夕方という時間もあり、客は少ないだろうと思って入った喫茶店はかなりの盛況ぶりで驚きつつも、店内をよく見渡してみると何故か黒い服を着た老若男女が店内を占拠している。

ファミレス二次会騒動の時は店の外から見る側だったのに、今回はその占拠の中に入ってしまったのだから、どうも座り心地が悪い。

まして、客先でプレゼンだからとお洒落要素の低い落ち着いたスーツを着ていることも相まって、外からこの店内を見た人は自分も「喪服族」として見ているであろうと思うと余計、席を立ちたくなってくる。

そういえば、この喫茶店の近くに斎場があったことを思い出した。

そして、時刻は18時前とくれば、この店内に居る人が通夜に参列する客なのだと考え至ったわけだ。

しかし、通夜に参列するであろう人たちの多くは、辛気くさい雰囲気醸し出しているわけでもない。逆に久し振りに会う親族や、近所の人たちと和気藹々と出番を待っており、それまでの「葬式」というイメージとはかけ離れた店内の状況にたじろいでしまうのは、何故だろうか。

たぶん、通夜が始まったらこいつらの多くは故人を偲んで…とか言ってハンカチを目元に当てながら泣くフリをするんだろうな。

だって、コーヒー一杯でこんなにハイになって騒いで「神妙」とはかけ離れて騒いでるのだから、泣くなんてこと、演技以外考えられないだろう。

などと思ってしまうのは、人間が腐ってるからか。

そんな捻くれた思考しか出来ない自分だが、親族の誰かの葬式という場になれば涙を流すことの出来る人間でありたいと思う。

思うが、結局、仕事柄なのか葬式の運営などが気になってしまい、嘘でも泣くことなど出来ずに、淡々と式を終わらせるのだろう。

この時は「だろう」という想像で終えたが、喪服族との出逢いから半年もかからずに喪主の家族として葬式をしなければならない立場になり、その想像が実現されることとなった。

人間讃歌

今回の作品は『黒い牛乳』でのテーマ「グランギニョル」に合わせて書いたものですが、『牛乳』のコンセプトに合わず、ボツになった作品となります。

人は誰しも己の中に悪魔が存在している。

こんなことを言ったら某宗教が許さないことだけれど、感情がある人間だからこそ、他者を妬んだり、恨んだり、見下したりする気持ちがあるものだと思っている。

それは、人が人であるが故の存在で、そういった感情があるから人の世には争いが絶えないのだろうと思う。

別にその感情が悪いとは言わない。

その感情があるから、人は人であるのだし、他の動物とは違う進化を遂げたのだろう。

しかし、本当にそれは「進化」と言えるのだろうか。

逆に「退化」なのではないか。

妬み故に争い、その争いから生じた恨みが新たな争いを生むという無限ループ。

人の世において、争いが無くなるということはないだろう。

常に無い物ねだりをする存在だからこそ、人は人であるのだ。

「考えられるから人」ではないのだ。

他者よりも優位にありたいという気持ちが強いから、自分がないものを持つ他者に出会うと妬むのだ。

優位に立ちたいと思うのなら、自己を成長させていけば良い。

他者に負けない何かを見つけて、それを自分の「売り」にしていければ人はより良いものへと変化を遂げる。

しかし、怠惰な人は自己の成長などに重きを置かず、自分が持ち得なかった物を持つ人に憧れて、憧れが妬みに変わり、他者からそれを力づくで奪おうとする。

人という存在は本当に救いがないように思えてならない。

何故、憧れを抱いた瞬間が「成長」のサインだと気付かない。
他者から奪うことの方が簡単だと何故短絡的に考えようとする？

結局は「己が一番だ」というプライドにしがみついて、そのサインに気付くことなく過ごしていることが一番の要因のように思えてならない。

だったら、そんなプライドを捨ててしまえばいい。
自分が知らない世界を見た時、それまで自分がしがみついていたプライドが如何にちっぽけなものかが判るはずだから。

成長するサインを見過ごすな。
自分が他者から憧れる存在になれば、良いだけの話だろ。

平和の祭典などと言うものが開かれている一方で、平和とはかけ離れた生活がこの世界には存在している。

他者を見下し、そして自分こそが優位に立てるという過信が人を「人たる存在」にさせている。

そんな人の荒唐無稽な人生という名の舞台を見て、神々は何を感じるのだろうか。
恐らく、争うことしかしない人の人生は彼らにとって「喜劇」でしかないのだろう。

熱にうなされた人が最初に求めるもの

あまりにも暑かった。

今自分が立っているコンクリートが溶け出すのではないかと思った。

もしそうなれば、某お笑い芸人が言うようにブラジルの皆さんに「こんにちは」出来るのではないか？と真剣に考える程、暑さにやられていた。

残業もそこそこに、帰宅ラッシュを避けて電車に乗り最寄り駅まで無事に辿り着いたが、これから猛暑日乗り越えた我が家へ帰ることには躊躇した。

恐らく40度とかいうふざけた情報をこちらに提示している時計兼温度計を見る勇気が持てなかったからだ。

そう考えると、家に帰りたくなくなる。

だから、涼を求めて近所の喫茶店に入ることにした。

そして、迷うことなく頼んだのは喫茶店にあるとは思わなかったかき氷とドリンクセット。

かき氷が来て五分後に、メニューを迷うことなく決めたことに後悔することなど考え及ばない自分はおもむろにバッグから資料を取り出し、明日のプレゼンについて思いをはせた。

何故、自分はアイスコーヒーなんて頼んだのだ？

いくらここまで来るのが暑くて水分を求めていたからって、かき氷とアイスコーヒーの取り合わせはないだろ？

それにこのかき氷の量はなんだ？

明らかに「カップルで食べたら美味しいですよ」というサイズではないか。はっきり言って「お一人様サイズ」ではない。こんな量のかき氷、全て食らったら一発で腹がノックダウンしてしまう。

五分前の自分を殴り倒したい。

心からそう思った。浅はかな考えしか持ち合わせていなかった自分をボッコボコに殴りたい。

かき氷の一口目はその冷たさに食した者に感動を与え、二口目は喉を潤し、三口目は身体全体の

熱を取り払ってくれる。そして、食す者に優しく涼を与えてくれるのだが、今日はそんな贅沢なこと言っていない。アイスコーヒーは目の前に置いて、無心で次から次へとかき氷を口に運ぶ。

だが、五口目にして頭がやられた。

そして思うのだ。何故自分はアイスコーヒーを頼んだのかと。

かき氷のおかげで、身体に籠っていた熱は全て冷やされたのだが、今度は逆に冷やされ過ぎて身体が温かい飲み物を欲しているのだ。

それなのに、自分の目の前には汗を大量にかいたグラスとアイスコーヒー。

オーダーを取った時は喉も乾いていたから、すぐに飲めるアイスコーヒーを欲していた。しかし、喉が求めていた水分はオーダーを取る際に持ち込まれたお冷やでその欲は既に満たされた。

だから、アイスコーヒーである必要は全くなかった。

と、今更後悔してもこのアイスコーヒーがホットコーヒーになるまで店にいるつもりはない。

最初の一口目の感動など、既になかったことになっている頭はかき氷を拒否しているが、それを無視してかき氷をかつ込み、残されたアイスコーヒーを一気に飲み干す。

今度からかき氷を食べる時は必ず温かい飲み物を選択しよう、そう心に決めた。

自由への迷走

小学生の頃、担任が「この時間は勉強しないで自由にしていぞ」と言ったのでボールを持って外に行こうとしたら、叱られた。

中学生の頃、遠足で何処かの科学館だかに連行された時、「あとは自由行動だぞ」と言われたので科学館から出て家に帰ろうとしたら、叱られた。

自由とは一体なんなのだ。

「自由にしろ」と言うから自分で考えて行動しようとしたのだが、叱られるのだから、それは彼らが言ったのは本当の意味での「自由」ではないだろう。

社会には一定レベルのルールがある。

恐らく、彼らの言った「自由」は規定に則った範囲内の「自由」であり、その規定から逸れた行動は却下すべきものなのだったかもしれない。

幼い頃から捻くれていた自分は叱りつけた先生方に対し、「それは自由ではないじゃないか。自由にしろと言ったのだから、“自由”にしたっていいじゃないか。では、“自由”とは一体なんなのだ」と反論をした。反論をしたが誰も彼も明確な答えなどくれることなく、オトナはダンマリを決め込んだ。

先日、テレビのニュース番組を見ていて「”言論の自由”は認めるが、宗教においてはそれを認めることが出来ない」と主張する某世界三大宗教の一つの信者が話をしていた。

「言論の自由」とは社会の規定に則ることなく好き勝手にやっても良い！という免罪符なのだろうか。

某国の王室のトップレスやらなんちゃらについても、「言論の自由」が当てはまるのだろうか。

それが、ヌーディストビーチやらプライベートビーチなら誰もやっていることを「王室の人間だから」という理由だけで写真を撮られ、果ては雑誌の表紙を飾り、これがネタで雑誌が売れる！と判断する人間が雑誌を作っているのであれば「言論の自由」というヤツがもたらす“自由”の免罪符の効用は凄すぎる。

王室の人間が「たまたま」ヌーディストビーチで脱いだ写真が雑誌の表紙を飾るのならば、「たまたま」ヌーディストビーチで脱いだ大阪のおばちゃんの写真を週刊誌の袋とじで特集したって別に問題ないじゃないか、と思ってしまう自分に問題があるのだろうか。

「何をやっても良い」という免罪符が「自由」であるのなら、自分は若い頃叱られ損をしていたことになるのだろう。

そして、某宗教のデモについても、「コレが認められた”自由”なのだから、無駄なことはせず諦めなさい」と某王室が言ったら、それはそれで楽しいことになるだろうと不謹慎なことを考えながらビールを飲む。

牛井と乙女と更年期

更年期の課長が要らぬ女子発言をした。

ここではっきり言いたい。それは決して女子発言ではないと。お前を女子だなんて断固として認めたくない。認めない。

或日の昼休み、「私、一人で牛井屋やマクドに行ったことがないのよね」と言い出した。

そんなことを急に言われてどう答えれば良いものか。困る部下たち。そして、更年期の言うことに無視を決め込んだ部長。

以前、女性も入りやすい個室のラーメン屋が出来たというニュースを見た。自分は全く気にもしないが、女性という人たちはラーメン屋也、牛井屋には一人では入れないという風に考えるようである。

個人的な意見を言えば、個室のラーメン屋とは如何なものかと思う。誰にも見られたくないという気持ちがあるのならば、別に無理して入らなくてもいいのではないかと、思ってしまうが、経営陣からしてみると重要なのは「如何に女性客に良い印象を持たれるか？」なのだから、男性としてはたまったもんじゃない。何が悲しくて野郎と顔付き合わせてラーメンなど喰わなきゃならんのか。

そういえば、うちの会社の人事にいる女性の先輩が「お一人様」でバーに通ってる、などという話をしていた。

一人の方が気楽だし、好きな時に酒が飲めるから「お一人様」という高いハードルを一度越えてしまえば、後は気にせず何度も通えるようになる、などと胸を張って部長に自慢をしていたのを思い出した。

「男女平等」という言葉ではないが、今やそうやって自分が行きたいところへ一人で行く「お一人様」で活動的に行動をしている女性が増えてきているのかもしれない。

更年期課長の思わぬ「バージン」発言の衝撃が収まった頃、無事に「脱バージン」を果たしたという要らぬ報告を受けた。

「今日、部長と一緒に初めて牛井屋に行っちゃった」

えっ?! 「お一人様」 云々の前に牛丼屋デビューすらしてなかったのか!!
乙女ぶってんじゃねーよ!

嫌い嫌いも好きのうちにはなりません

電車に乗ると意識しなくてもやってしまうことが誰しもあると思う。

例えば、「座りたい！」という意識から無意識に空いている席やスペースを探そうとすることとか、座るなら加齢臭がしそうなオッサンの隣よりも、香水の香りがしそうな女性の隣に座ろうとしたり……など人それぞれの行動を電車に乗り込んだ一瞬にしていることだろう。

電車に乗るとつい、車内に垂れ下がっている中吊り広告を隅から隅まで眺めてしまう行動もまた一つあるのかもしれない。

一度、某山手線であったのだが中吊り広告を期待して電車に乗った際、目にしたのが韓流アイドルの広告だった時の衝撃は半端なく、隣の車両に乗り換えようとしたけれど、隣も同じ広告一色だった時、一体誰にこの憤りをぶつけたら良いのか本気で悩んだことがあるほどに、電車の中吊り広告というヤツに期待してしまっている自分がいる。

そこで見つけた「病的に自分が好きな人」という文字。

何を言ってるのだ？それが最初の正直な感想だった。

「お前、病気じゃないの？」と他人から思われる程自分が好きな人が本当に存在しているのか？という疑問が沸いて出てくる。

「自分が好き」というのは一種のナルシストとか言われるものなのだろうか？くらいにしか思えない自分は、大層なまでの自分嫌いだ。自分が好きな人の精神なんて全く判らないし、逆に言えば何故自分がそんなにも好きなのか？と問いつめたい程だ。

しかし、最近はこの記事にあるように「病気じゃないの？と思われるくらい自分が大好きでたまらない」という人が増えているそうだ。

まず、その典型が「人の話を聞かない。自分の主張だけをし、それを押し通そうとする」らしい。

そこまで調べてなるほどな、と思う。こういう典型な人、ゴロゴロ存在している。それこそ、社内で石を投げれば確実にこういう人に当たる！というくらいゴロゴロ存在している。

こういう人は自分の主張が通らないと怒り出し、仕舞には泣き出すのだから始末に悪い。上司も

こういう部下だけは持ちたくないとい前酒の席で話していたことを思い出す。

「病的なまでに自分大好き」種族は、過剰なまでにもてはやされているSNSという起因により増殖をしているようだ。別にそういう人が増える分には何も文句はないのだが、それがネットの世界限定ではなく、現実にもまで浸食してきてしまうことに「おい、ちょっと待てよお～」と言いたくなる。

「ネットの世界でのこと」と「現実の世界のこと」の棲み分けが上手く出来ずに、「ネットの世界」の自分のまま、現実社会にしゃしゃり出てきた挙句、「自分のことを誰も理解してくれない」と泣き出すのだから、本当に始末に悪い。

「現実では誰も自分を受け入れてくれない。ネットの世界でならば、趣味の合う人たちも居て、少しの我侷なら聞いてくれる」なんて寝言は寝ていても言わないで頂けませんか？と丁重にお断りしたいくらいだ。

そんな中吊り広告を見ながら、「自分大好き」な後輩の指導をしなくてはならないかと思うと、まだクレマーで付き合いたくない！と誰もが思う客先に行った方が気分が楽だなど考える。

だから自己紹介は嫌いです

自分には「趣味」というものがないということに今更ながら気が付いた。

就職活動をしていた頃は、恐らく無難に「読書」と書いていたと思う。恐らく……

何故こんなにも「恐らく」と強調するのか、というと、その当時自分が履歴書に書いたことを全く覚えていないからだ。読書が好きかもしれない、だから嫌いではない、けれど人に大見得切って言えるようなほどの本を読んだかと問われれば、「イエス！」と答えられない、故にそれを趣味と豪語していいものかと悩むのだ。

多くの人が趣味として提示する映画鑑賞なんかも嫌いではないし、逆に言えば好きなのだが、それを趣味と豪語して言えるほど多くの作品を見ているわけではない。映画について問われればある程度のことは答えられるが、全てのことに答えられるわけではないので、「趣味としていけない」というカテゴリーに入れてしまう自分がいる。

そんな自分は友人たちから言わせると「多趣味」であるらしい。

「何故、人に自慢出来る趣味がないのに多趣味と言われなくてはならないのか？」と答えたい瞬間が多々ある。「多趣味だ」と思い込んでいる友人たち曰く、どのジャンルの話をしても会話が成立するから多趣味なんだろうと言うのだが、会話の引き出しが多いから故に多趣味と判断するのは些か軽率ではないかと言いたくなる。

別に、「多趣味なんだ。すごいねー」と言われたい訳でもないし、ただ単に好奇心が旺盛で多くの知識を求めた故なのだから、それが趣味と直結して考えられてしまうことに、「何だかなー」と言いたくなってくる。

はっきり言って、自分の持っている知識は「広く、浅く」がモットーなので突き詰めて質問をされれば答えられないことの方が多くあるため、自分では「趣味」というカテゴリーに入れる事が出来ないのだ。

というよりも、恐れ多くて「趣味」として豪語出来ないのだ。

だから、自分は趣味がないのだ。

月に約3冊は本を読みます。(漫画は除く)

月に約4本は映画を見ます。

食費を浮かせる為に、頑張って自炊などをしています。

楽器は弾けないけれど、ほぼ毎日音楽を聴いています。

しかし、自分には趣味がありません。

世間の波では波乗りが出来ません

「コレ、すっごく美味しかったよ！だから、一口あげるね。あーん、してえー」

浮かれはしゃぐ女の甲高い声が隣から聞こえた。その女の行動に合わせるかのように、彼女の前に座った男は周囲の目を気にしながら口を開けると、何かを口に入れられていた。その姿を見て思った。「これは餌付けか？」と。その後、女は男が食べているものが食べたいらしく、口をパクパク開けてアピールしている。「お前は池に居る鯉か！」と。お前など、錦鯉なんてなれやしない。土臭い真鯉が精々だ！と思ってしまうのは、別に彼らの行動が羨ましいわけではない。断じて違う。

そういえば、12月の半ばくらいから仕事の合間に訪れる憩いのカフェにイチャつく男女が目につくようになった。12月はクリスマスから始まり、正月、バレンタイン、ホワイトデーといった「一人では過ごしたら周囲から何を言われるか判らないので急いで彼氏、彼女を作らなければならない」月間であったことを思い出す。会社の後輩もこれらの冬のイベントは一人で過ごすには悲しすぎる、という理由から彼女を作っていた。本人曰く、「ホワイトデーまで持てば良いですけどね」だそうで、男も女も一人では過ごしたくないから急いで相手を捜し、何とか体裁を保てると速攻で別れるそうだ。

何とも面倒くさい季節である。

この隣の男女も、お互いを探りながら会話をしているところからすると強化月間に煽られて出来たペアなのだということが、大した脳みそを使わなくても見て取れる。

何故そこまで体裁を保たなくてはならないのか。別に、一人だって良いじゃないか。どうせすぐに別れるのであれば、その場しのぎの関係を結ぶ事が面倒なのではないか、と思ってしまうは余程の人間嫌いか、無頓着なのか。

人それぞれなのだし、イベントに託つけて相手を見つけても虚しいだけだということに気が付かないのだろうか。

そこまで周囲の目を気にする必要があるのでしょうか。

別に良いじゃないか。自分がそれを望まないのだから。

「先輩、私も彼女みたいに計算高い女になれば彼氏が出来ますか？」一緒に休憩をしていた後輩の一言で現実に戻ってきた。

後輩よ、よく聞け。周囲の目に怯えるなかれ。ヤツらは事なかれ主義者なのだから。

他人が食べているものが美味しそうに見えるのは何故か

「嗜む」とは一体、どれくらいの達成度を指すのだろうか。

趣味を聞かれた際にそう答える人がいるが、それがどの程度真剣にやっているのか判らず、どう答えたら良いのか正直悩む。

先日、会社の先輩に「ヲタと言われる人が羨ましい」と言われた。先輩曰く、アルコールが好きで色々と飲んでいたが、大学生の頃急性アルコール中毒になってから控えるようになったらしい。その時の経験からか、その後は酒だけでなく様々なことをやっても全て中途半端になってしまい、自分の趣味に打ち込める人が羨ましいそうだ。

斯く言う自分も人様に自慢出来るような趣味など持ち合わせていない。仕事が終われば、早々に帰宅し朝になるまで泥のように寝る。休日も寝て過ごすだけの生活を飽きもせず続けているだけだ。

そんな生活を送っている自分だからこそ、その先輩は多趣味ではないかと思ってしまう。「何にも打ち込めない」と嘆いているが、実際は仕事が終われば自宅で作曲をしていたり、休日はクラブでDJ活動をしていたり、ビールはギネスしか認めないと言っていたり……。

何だ、このモテそうな男は！と思わずツッコみつつ、無趣味な自分からしたら何とも羨ましい生活を送っていると羨望にも近い目で見ってしまう。

恐らく先輩は「凝り性」な上に「完璧主義」という側面を持つ類いの人なのであろう。だから、何かに興味を持つとトコトン突き詰めて成し遂げようとするのだ。トコトン突き詰めてしまうから、次第に周囲の状況が見えなくなり、興味の対象物以外のものが全く出来なくなってしまうのだ。それこそ、寝食を忘れるくらいに。

その結果が、学生時代の急性アルコール中毒なのであろう。

しかし、「無趣味」で「面白味」のないモテ要素が著しく低い自分からすれば、「別にいまのままでも充分ではないか！」と思ってしまうのは、モテないヤツの僻みでしかないのだろうか。

隣の家の庭の芝は、自分の家の芝よりも綺麗に見えるものなのだ。

一体、人は幾つになるまで「ないもの強請り」をするのだろうか。
他人を羨み、自己卑下する事が、人が「人」である証なのだろうか。

ちなみに、「嗜む」とは、「このんで愛好する」とか「このんで励んでいる」という意味になるらしい。

なんだ、「このんで極めた」という意味かと思っていたじゃないか。
それならば、今後「ゴルフを嗜んでおります」という人に対して「へえ～」と興味が全く無さそうに答えることにしよう。

刑法246条を適用することは一体何か

「何か警視庁がインターネットを通じて振り込み詐欺の新しい名称を募集したみたいっすよ。さっきこっそり新名称の応募を見てみたんですけど、大喜利状態で、アレでちゃんとした名称がつけられるのか疑問っすよね」

最近流行している振り込み詐欺というヤツは、振込先を指定してこず逆に現金を直接受け渡すタイプに要らぬ進化を遂げたようで従来の名前では詐欺内容を言い表していないということで、名称変更を余儀なくされたようだ。

それよりも、昼休みだからといって会社のパソコンを使ってネットサーフィンをするような後輩に育てた覚えはないと文句をつけない所だが、何とも面白いネタを頂戴することが出来たので、今回だけは大目に見てやろうかと思う。

詐欺といえば、結婚詐欺やら何とか詐欺やらあるのだが、それらに共通するのが「他人の良心や欲望につけ込み、金を奪い取る」ということだ。

そんなこと、既にご存知かと思われるが、頭で理解していても実際にそのような状況に追い込まれると、理性では片付けられず、相手の口車に乗ってしまうものなのだ。

そんな自分も最近、詐欺にあった。

それは、所謂「金を奪い取る」類いのものではない。自分の懐具合には全く影響がないものの、精神的に多大なる損害を与えたものであったことは確かである。

同じ業種をしている先輩と去年会ったとき、先輩はこう言った。「自分は、鬱病だ」と。

同じ業種をしている鬱病の先輩と先週会ったとき、先輩はこう言った。「自分は、アスペルガー症候群だ」と。

だが、この先輩は明らかに鬱病ではない。精神科に通って薬なりカウンセリングなりを受けているのかと問えば、「世間体を考えてノーだ」と、さも自分の返答が如何に素晴らしいかの如く、答えやがった。

その先輩が、鬱病の代わりに見つけたものがアスペルガー症候群という言葉であった。

はっきり断言してやろう。お前は鬱病でもなければ、アスペルガーではないと。

鬱病の時もそうであったが、ある一定の病気が社会的ステータスになると、「自分もそうだ」と声高々と叫ぶ輩がやたらと発生する。その鬱病の時と同じような現象が、発達障害にも起こっているのであろう。

自分が上手く社会に適用出来ない、社会を生きていく力が欠如しているということを、己のせいにはせず、他のもののせいに仕立て自己正当化を図るとは何とも小学生以下の自己防衛反応ではないか。

そう言い訳をすることで、社会に溶け込むことが出来るのか？それは、「否」であろう。結局、己を受け入れることが出来ない自分自身が問題なのだから。

というように、振り込め詐欺にはあったことがないが、「俺、病気だから」詐欺にはかなりの頻度で出会っている。

そろそろ、この詐欺にも何らかの法的処置を施してほしいものだ。

ちなみに、先日「私って可愛いでしょ」詐欺に遭遇。日本という国はいつから詐欺師大国になったのだろうか。

頭から食べると賢くなれるらしいですよ

「たい焼き心理テストってあるらしいですよ」

今年入社してきたばかりの新人に唐突に言われた。「心理テスト」と言われたのでオイソレと答えたくはない。だが、いつも眉間に皺を寄せている課長がニコニコと答えているから、お前も空気を読んで答えろよ！と係長に言われたが、「空気は読むものではなく、吸うものですよ」と答えてみる。

たい焼きの食べ方を質問し、それについて答えるという一連の会話は日本以外の国では全く成立しない会話だろう。菓子の食べ始める部位など知って何がしたいのか？「クッキーをどこから食べる？」位に不毛なもののように思えてならない。そんな風にたい焼きの食べ方占いが不毛だと言ってしまう自分の前世は恐らく日本人ではないのであろう。

ここでふと思う。たい焼き意外に食べる部位を聞くことが会話として成立する食べ物があるのか、と。

銘菓ひよこはどうだろうか？「頭から食べる？それとも下半身から食べる？」

うん、地球上で成立しそうにもない会話だ。

「ガリガリ君、上から食べる？下から食べる？」

うん、ない。そんな会話、絶対ない。田舎の祖父がコーンの先っぽからソフトクリームを食べたが、こんな会話、絶対に成立しない。

「寿司、ネタから食べる？シャリから食べる？」

ツウな人はネタから食べると聞いたことがあるが、恐らく9割5分の方はネタ + シャリのワンセットで食べるであろう。

「人形焼き、頭から食べる？顎から食べる？」

いやいや、一口で食ったら食べ始めの部位など全く関係ないだろう。

などなど考えてみると、如何にたい焼きというものが異質な食べ物であるという考えを拭えなくなってくる。「焼き鳥、食べるならどこから？」「焼肉、食べ始めるのならどこから？」こういう食べ物であれば成立するが、鳥や牛が一頭、目の前に置かれた状況で食べる部位を聞くという状況はとても一般的とは言い難いことから、やっぱりたい焼きというヤツは異常すぎるのではないだろうか。

たい焼きのことばかり考えていたら、ふとした疑問を抱いた。

「宇宙人が地球人を食べるとして、どの部位から食べ始めるのか？」と。

この会話を宇宙人たちが一般的にしている、「地球人食べ心理テスト」なるものが存在するのなら、今、目の前で展開されている「たい焼き食べ心理テスト」なるものは健全なものであるということが言えるのではないか。

よし、ここで決めた。

もし、自分が宇宙人に出会って食われそうになったら、どの部位から食べるのが好きなのか聞いてみることにしよう。

美味しそうな獲物を狩る方法

「人は見た目9割」なんていう書籍が売れたのは一昔前のことだろうか。

営業という人と関わることの多い職故に、一応見た目には気を使っている。初対面の人と会うときは、いつも以上に気にするものだ。名刺には自分の性格など書いてはおらず、たった1時間弱の商談で自分の良さなど理解してほしいと言ったところで無理な事は重々に理解している。だからこそ、目から入ってくる情報 = 見た目には気をつけているのだ。

しかし、本当に大切なのは「見た目」だけなのだろうか、とふと考える。

例えば、電車で痴漢をする人たちは相手の服装や髪型などの見た目からの情報で獲物を探すのだろうか？

例えば、街でキャッチセールをしているホストは相手の服装や髪型などの見た目からの情報だけで獲物を探すのだろうか？

例えば、プレハブ小屋の前に立って辿々しい日本語で客引きをしている女は相手の服装や髪型などの見た目からの情報だけで獲物を探すのだろうか？

恐らく、「見た目」から「コイツ、良いカモになるなー」とか思っているのかもしれないが、それだけではないはずだ。

例えば、街を歩いていてガイドブック片手に迷子になっている外国人に道を聞かれる場合、彼らは相手の服装や髪型まで見ているのだろうか？

そこには、「この人なら声をかけやすい」という相手の雰囲気から得た勝手な先入観が存在するのではないだろうか。

ということは、痴漢やホスト、客引きの女は相手の服装や髪型といった「見た目」ではなく、街行く人が持っている雰囲気でも声をかけるのではないか？

では、その「雰囲気」というヤツは一体何者なのか？

身長が小さく、庇護欲をかき立てられるような雰囲気を纏った女が、バリキャリな感じでカッチリをしたパンツスーツを着て、ピンヒールで社内を闊歩していたら、どういう印象を持つのだろうか？

逆に、スラリとしたスタイルで、目力が強く、己の力だけで社会の荒波をクロールでスイスイと渡っていきそうな女が、パステル系の色のふんわりとしたワンピースを着ていたらどういう印象を持つだろうか？

上記のような人を目にしたとき、「個人の好き好きだから、自分が好きな服装をしたら良いと思うよ」というアドバイスをしつつも、腹の中では「お前の雰囲気にあってないのだから、好きでもそういう服装するなよ。服が泣いているぞ」と思うのでは無いだろうか。

勝手な判断かもしれないが、人それぞれ個性があるように、その人にはその人にあった空気感、雰囲気というものが存在しているのだと思う。

その雰囲気から、「この人は恐らく、こういう人だろう。ああいう人だろう」と勝手に判断するのだろうか、痴漢やホストなどはそれを頼りに獲物を探すのではなかろうか。

そうなる、見た目を気にする事も大事だが、相手に与える自分の雰囲気というものをまずは知ることが重要なのだろう。

というか、どうすれば間違っただ印象の雰囲気を与えずに済むのだろうかを考えると何をすべきか実は、全く判らない。

判らないながら、今日も見た目だけは大事にしようと思う。

恋愛脳の人得られるモノと失うモノ

恋に恋していたり、恋愛依存症だったり、人は何故「恋愛」にこだわるのか。

隣の席に座る後輩が全く使えない。会議に必要な資料のコピーをしても、両面印刷をしていたくせに裏表の上下が逆さまになっていてやり直しを言い渡されたり、パソコンの前に座って涙目で溜め息ばかりしていて全く使えない。本当に使えない。周囲の人間が言うところによれば、昨夜彼氏と喧嘩をしたらしく、別れる、別れないという瀬戸際にいるらしい。だが、はっきり言おう。溜め息ばかりしていて仕事が出来ないのならば、会社には来るな。早く帰ってくれ。社会人としての誇りがあるのであれば、とにかく仕事を確実にやってくれ。

常々思うのだが、事ある毎に「彼氏、彼女が欲しい」と公言している人種は何を目標に生きているのだろうか。もしこれが、「日本の少子化を少しでも食い止める為に、若いうちに結婚をして子供が10人くらい欲しい」という気高き目標あつての言葉であれば、納得である。どうぞ、その貴き目標を実現させる為、合コンでも街コンでも何でも好き勝手にご参加下さいと言ってやりたい。だが、実際問題としてそういう目的あつて参加する人などいないだろう。

多く人は「彼氏や彼女がいるというステータス」の為とか、「1人だと淋しいから」という気持ちを抱いて恋愛をしているのではないだろうか。某ドラマで「人という字は人と人が云々」と言っているが、彼の言う支え合う人たちの間には、恋愛感情というものは存在していないと思う。しかし、人は恋愛にこだわる。「相手が居たって構わない。だって想うことは自由なのだから…」とか、それこそどうでも良い、自分に都合の良い想いを口にしながら恋愛にこだわるのだ。

そんな事を考えていたら、後輩は「恋に破れそうな可哀想な私」というキャラを周囲にアピールしていたり、恋に恋しているような輩は「恋をしている自分はリアルが充実しているの!」ということを示そうと無駄な努力をしているのではないだろうか。結局、恋愛に依存していたり、悲恋を含めた恋愛ゲームのキャラクターのようになりきるということは、自己満足を得るためのものでしかないのではないか。

しかし、ここではっきり言おう。いくら、リアルが充実しようとも、自分の恋愛が成就しようとも、人は腹を満たす為に仕事をしなくてはいけないのだ。恋愛をしていたって腹は膨れないのだから、恋愛などさておき、おまんまの為に働かなくてはならないということを肝に命じて欲しいものだ。

だからこそ、心を鬼にして言おう。

後輩よ、仕事がきちんと出来ないのなら邪魔だからさっさと帰ってくれ。

サバンナに立つ草食系と肉食系と甘い蜜を吸う昆虫たち

「欲望に負けたんだよ！」

昼食時の定食屋に似つかわしくない台詞が聴こえた。声のする方を見ると無地のTシャツにカーゴパンツという明らかに大学デビュー出来なかった男が二人、メニューを片手に向かい合わせで座っていた。昼時にするような話とは思えない「欲望に負けた話」が聞けるのかと店内にいる客の耳が彼らの声を拾おうと必死になっているのに、その後彼らが語り出したのは「いつぐらいからテスト勉強をすべきか？」という事。

くそ、欲望まみれのドロドロとした話が聞けるのかとワクワクしたこの胸の高鳴りをどうしてくれるんだ！と自分を含め多くの客が落胆したことだろう。しかし、彼らはそんなことを露とも知らず、こちらからしたら至極どうでも良いことを延々と話し続けたのだった。

そういえば、ここ最近「草食系男子」やら「肉食系女子」やら「ロールキャベツ男子」といったグループ分けが流行っているらしい。

「肉食系女子なんて可愛らしい言い方などせずに、“カマキリ女子”とか言えば良いのに……」と言った後輩のことを思い出す。

彼は、「彼女」という存在に貢ぐだけ貢いだ挙句、「縁の切れ目は金の切れ目」という感じに捨てられた過去を持つ男だった。搾り取られるだけ搾り取られ、生きる屍と化した後輩を見て「肉食なんて生易しい表現なのだな」と当時、思ったものだった。

逆に、「私、肉食系です」とにこやかに話していた同期が、狙い定めた男に「友達以上、彼女未満」な扱いを受け続け、憤りながらも求められればそれに答えてしまうという無限ループを繰り返していたことも思い出した。結局彼女は「普通の男女の関係」が築けないまま、人には大きな声で言えない関係を今でも続けているのだから、アドバイスのしようもない。たぶん、それで良いのだと思いながら、「肉食系」を豪語するようにまた違う獲物を探して彷徨っていることだろう。

そんなことを思い出しながら食事を終え、「欲望に負けた」彼らに目を向ければ、二人揃ってメニューを胸に抱え、店内へ視線を泳がせていた。彼らが入店して恐らく30分弱が経過しているのだが、その様子からまだ注文すら出来ていないようだ。ファミレスにある呼び鈴がないかとテーブルの上を探し、どう注文すべきか相談する姿を見て、これが俗に言う「草食系男子」というものなのかと納得する。

お互いに彼女が居ないと話していたが、その服装にその態度ではまだまだ先の話になりそうだなと、自分を棚に上げて彼らを眺める。「カマキリ女には気をつけろよ」と心の中で呟き店内をせわしなく歩き回るおばちゃんに支払いをし、彼らが困っている旨を伝えて店を出た。

考える葦にもなれない

<http://p.booklog.jp/book/53543>

著者：広瀬 瑞記

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ch-run/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53543>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53543>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ